

○住吉 正・佐々木豊  
(九州沖縄農研)

【目的】

近年、九州の一部地域において、品種「春のいぶき」を用いたソバの春播き栽培が普及しつつある。3月中下旬に播種して6月には収穫できるため、夏作物との輪作が可能であり、新たな輪作体系としての「春播きソバー大豆」体系の確立・普及を目指した技術開発が取り組まれている。しかしながら、大豆作付け中における前作ソバの脱粒種子からの漏生・雑草害が懸念されるため、まずは春播きソバ収穫後における漏生ソバの発生について調査した。

【材料および方法】

調査は2012年及び2013年に、九州沖縄農業研究センター（福岡県筑後市）において行った。

1) ソバ収穫後の脱粒状況

ソバ「春のいぶき」を春播き栽培し、6月にコンバイン収穫した圃場において、ソバの脱粒状況を50cm×50cm、4～6反復で調査した。また、回収した種子について、30℃での発芽率を調査した。

2) 漏生ソバの発生状況

①圃場試験：6月にソバ「春のいぶき」をコンバイン収穫した圃場を不耕起で放置し、7月に大豆「フクユタカ」を条間75cmで耕起播種した。同圃場において、漏生ソバの生存個体数を50cm×50cm、6～8反復で、大豆播種2カ月後まで定期的に調査した。

②ポット試験：水田土壌を詰めた1/5,000aポットを用い、6月に土壤表層にソバ種子をポット当たり300粒宛混和し、雨よけハウス内に設置した。湛水区と対照区を設け、湛水区では2～3カ月間を湛水条件とし、それ以外の期間、及び対照区は毎日灌・排水して、ソバの発生消長を調査した（各5ポット）。

【結果および考察】

1) ソバ収穫後の脱粒状況

コンバイン収穫後の圃場において、ソバ種子は刈り残し及び土壤表面への落下種子として認められ、落下種子は黒色～茶褐色の充実種子と、茶色の不充実種子及び一部が損傷した不完全種子とに分けられた。

刈り残し及び落下した充実種子の発芽率は22.2～58.8%、不充実種子の発芽率は1.1～9.7%で、これらの結果から圃場に残留した発芽可能種子数は、概ね200～600粒/m<sup>2</sup>と推定された(表1)。

表1 ソバの脱粒状況

年次	圃場番号	回収種子数			発芽可能種子数
		充実	不充実	その他	
2012年	1	593	957	331	347
	2	698	2067	91	211
	3	1329	3057	60	350
	4	433	1604	148	167
2013年	-	734	945	50	573

6月上中旬にソバを収穫した圃場において調査した。各50cm×50cm、4～6反復。数値はm<sup>2</sup>当たり粒数。  
その他の種子は、刈り残しまたは調査時に出芽あるいは土中発芽していた種子。  
発芽可能種子数は、回収した種子数に発芽率を乗じて算出した。

2) 漏生ソバの発生状況

①圃場試験：ソバ収穫後における漏生ソバの発生は、大豆播種期までの間に多く認められた(図1)。期間中の生存個体数の最大値は、2012年が約300本/m<sup>2</sup>、2013年が約400本/m<sup>2</sup>であった。

大豆播種後の発生は少なく、生存個体数の最大値は2012年が約15本/m<sup>2</sup>、2013年が約20本/m<sup>2</sup>であった。

2012年の1圃場における個体数の推移をみると、まず始めに溝部分で発生が始まり、畦上面での発生は遅れて開始した(図1)。その後、溝部分の個体は降雨時の滞水等により一部が枯死し、個体数が減少した。

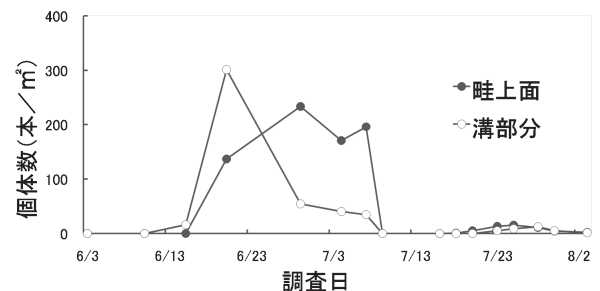


図1 漏生ソバ生存個体数の推移

2012年6月3日ソバ収穫、7月9日大豆播種。  
各区50cm×50cm、6反復調査。

②ポット試験：最終的な出芽率は70～80%で、出芽はごく初期に集中した。種子混和後10日目までに最終出芽数の85%以上、30日目までに95%以上が出芽した。湛水区では湛水期間中の出芽は認められなかった(データ省略)。